

申請者	学科名	デザイン工学科	職名	准教授	氏名	熊澤 貴之 印
調査研究課題	二坪の移動式井戸端建築空間におけるアートコミュニケーションが高齢者の居場所形成に与える影響					
当該年度分 交付決定額	1,000,000 円		研究期間	平成25年度		
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	熊澤貴之	デザイン学部デザイン工学科・准教授	都市建築計画	研究代表者 都市建築計画担当	
	分担者	中西俊介 横山裕子	デザイン学部造形デザイン学科・准教授 デザイン学研究科デザイン工学専攻1年	グラフィックデザイン まちづくり	グラフィック・メディアデザイン担当 建築まちづくり担当	
調査研究実績の概要	<p>農村交流による既往の研究はこれまで多くの研究がある。それらは事例の調査に基づくものや農村交流のためのプロジェクトの成果を論じるものである。しかしながら本研究のように実験的に農村交流プロジェクトを実施し、各農村交流プロジェクトが実感の変数を構成し、因子の効果値を定量的に検証した研究はない。特に、土地の者とよそ者である学生が地元素材や特産品を使用し、協働作業を行うことで交流し、季節を彩る造形作品を制作しているが、アート制作におけるコミュニケーションの規模を実験変数として統制している研究はない。このコミュニケーションの分類とアート創作活動の関係は本研究の独創的な視点である。図1に研究のモデルを示す。このモデルは視覚的にわかりやすい造形作品の展示に向け、地元の地域住民と大学生が協働しながら造形作品を創作することが農村地域包括支援に如何に繋がるかを検証する物である。これらの協働制作が地域における地元素材や特産物の再発見を生み出し、まちづくりビジネスが新たに活性化し、地域コミュニティの再構築に繋がることを狙うものである。</p> <p>そこで農村地域において人間と人間の関係と連携を大切にする社会を構築するため、農村交流のためのアート創造の方法を提唱し、内外志向型のコミュニケーション手法の違いによってアート創造が地域住民に与える影響を明らかにする。農村地域には豊かな自然環境と安全・安心な食が身近にあり、都市生活では得ることができない自然と人間が共生できる環境がある。地域住民の相互学習と地域づくりへの参画によって、人間と人間の関係を大切にする社会関係の創造を目指す。</p>					
	<p>国等の研究助成費取得のために必要な今後の取組を踏まえて記入のこと</p>					

<p>調査研究実績の概要</p> <p>国等の研究助成費取得のために必要な今後の取組を踏まえて記入のこと</p>	<p>本研究の最終的な着地点は地域全体が支える力を持つ（社会的包摂）と全体像を考えて支援し、自立を図っていく（包括的ケア）の構成を目指すことにある。過疎地域や農村部において地域社会との接点の生成と、市民の地域に対する興味や問題意識を顕在化させる役割を高めるために住民協働のアート制作による社会実験を2012年と13年の2年間実施し、その効果を把握する。近隣関係をマネジメントする方法としてグループアート制作の技法を取り上げ、小グループ若しくは大グループによるコミュニケーションを取り入れたグループアート制作が近隣関係の意識にどの程度の影響を与えるかを検証した。</p> <p>対象地を津山市桑下および岡山奉還町とする。高齢者同士の交流が少ないため、時間を共有できず、孤立化が進行している状況が増えているという話が聞かれた。</p> <p>この地域の特徴は稲わらやかずら、竹、たたらであることを地元住民から聞いた。かずらと竹は地域の山林に大量に生えており、特に竹に関しては電線に当たることも多く、伐採するなどの環境の維持管理が必要になっている。</p> <p>さらに、中西准教授が共同代表を務めるアートグループ「カルティベーション・パートナーズ」と共に、京都府和束町において地域住民を対象としたワークショップを実施した。イベント会場が狭小であるため、各ワークショップとも机ひとつ分程度の範囲で行った。同時に多くの人数が参加することは難しいが、一回あたり3~4人程度のミニワークショップを複数回に分けて実施することにより、少ない面積でもワークショップの実施が可能であることが実証できた。</p> <p>また、一坪程度の空間を利用して人形劇を各地で公演している影絵人形劇団蝸牛車のイベント公演を視察。イベント終了後に取材調査を行った。その結果、効率的な移動空間の設営に関して多くの手掛かりを得ることが出来た。</p> <p>イベント名：茶畑 丘の上 縁日 実施日時：2013年12月1日 12時~19時 場所：和束 茶畑丘の家（京都府相楽郡和束町白栖中出） ワークショップ内容：茶染め教室、陶芸教室、木版画教室、ぬいぐるみ制作、苔玉作り、麴造り、茶かぶき イベント公演：影絵人形劇団蝸牛車「パンにかビのはえる前に」</p> <p>以上、農村地域の包括支援に向けた協働のアート制作が住民意識に与える影響を検証した結果、小規模なアート制作の中で密なコミュニケーションを行うことが農村地域包括支援に向けて効果的であることが確認された。大規模なイベントを行うよりも小規模であるが、対象と正面から向き合え、協働して制作する人間と親密に対話した方がコミュニティを維持するための意識形成に効果的であることが把握された。大規模に行っている地域イベントは多々存在するが、それよりも人と人が協働して造形作品を作り出すことは人と人をつなぐ効果を持つことが明らかにされ、他者との一体感を感じられることが把握された。</p> <p>以上の知見から、過疎地域の地域づくりは、地域の特性を生かした取り組みを行うとともに視覚化されたものが間にあることで、人と人とをつなげ一体感を生むことが把握された。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>熊澤貴之、横山裕子： 農村地域包括支援に向けた協働のアート制作が住民意識形成に与える効果 日本都市計画学界論文集、2014年（投稿準備中）</p>